「禅林句集」考

田島照久

一

現在「禅林句集」あるいは同類の名称で一般に流布している一連の書籍群がある。手元にあるものを挙げれば、『和訓略解禅林句集』（山本峻岳編　光融館　一九二〇年）、『塗毒鼓（ずどく）　続編　全』（藤田玄路編　建仁僧堂　一九二二年　和本）、『禅語字彙』（中川渋庵著　柏林社　一九三五年）、『註訓禪林句集（改訂版）』（柴山全慶編輯　其中堂　一九七二年）、『新纂禪語集』（土屋悦堂編纂　其中堂　一九七三年）、『禪林語句鈔』（碧菴周道編　二玄社　一九九七年）などであるが、いずれも禅宗で使われている語句が字数に従って排列される字数排列形式で編集されている。(1)

さらにこの他に従来ある「墨場必携」の体裁に倣った内容分類形式に従って編纂されたものとして、『新撰　禅林墨場必携』（飯田利行編著　柏書房　一九八九年）、『新編　禅林名句撰』（青山社編集部　二〇〇〇年）などを挙げることができる。

茶掛に用いられる禅語を中心に収録し、読み下しと注釈を施したものとしては、『茶席の禅語大辞典』（有馬頼底監修　淡交社　二〇〇二年）、『茶席の禅語句集』（朝山一玄著　淡交社　二〇〇三年）などがある。

『新纂禪語集』では禅語は訓点が打たれ、送り仮名が施されているが、『塗毒鼓　続編　全』では禅語は白文のままである。両書とも出典表記はない。『禪林語句鈔』では禅句を白文で掲げ、その下に読み下し文と出典略記が付されている。

これ以外の上記書物はすべて、禅語に読み下し文と禅語の意味・解釈、出典表記等が付された構成になっている。これらはどんな目的のために編まれた書物であろうか。

臨済下では参禅入室の際、古則公案を用いるが、見解（げんげ）に下語（あぎょ）することが求められる。『塗毒鼓』『新纂禪語集』『禪林語句鈔』はこうした用途に供せられてきたのである。峻岳版『禪林句集』や柴山版『禪林句集』も僧俗を分かたず済下で広く用いられてきた、学人にとって必携の書なのである。

実はこれら上記の書物は興味深いことに室町時代以来の『句雙紙』および『句雙紙抄』の内容と形式とを忠実に受け継いでいるのである。本論文では現存する『句雙紙』および『句雙紙抄』の写本および刊本を一覧した上で、これまでの研究による分類を検討し、「禅林句集」の成立を跡づけることを試みたい。

二

川瀬一馬博士は「句雙紙考」[2]と題された論文の中で、現存する写本・刊本『句雙紙』を三類に分かち、次のような区分を試みている。

第一類

〔写本〕

（イ）『禪林之方語』

一冊、室町末期写、田中忠三郎氏蔵。本分墨附十九丁、前七丁と後十二丁と前後同時の別筆（第六・第七は両筆混在）。語の下に簡単な漢文の注釈が付けられている。巻首に「禪林之方語」と題し、その下に「自一字至十字」と記されている。「一字之類」は「灼」に始まり、「二字之類」「三字之類」「四字之類」「五字之類」「六字之類」「七字之類」「八字之類」（「九字之類」は無し）「十字之類」に分類され巻末追加を入れ合計八百三十三句が収録されている。

（ロ）『隨方郷談』

一冊、室町末期写、石井氏積翠軒文庫旧蔵。田中氏蔵『禪林之方語』と同じ系統に属するが、句数が少ない。「一字之類」は「灼」に始まる。「二字之類」「三字之類」「四字之類」「五字之類」「六字之類」「七字之類」「八言」までで後を欠く。後半に寛文一三年写、『禪門方語』と題する類本と合綴。

（ハ）『禪門方語』

石井氏積翠軒文庫旧蔵『隨方郷談』に合綴されている一冊、室町末期写。墨附十四丁、十字、八字、七字、六字、五字、四字、三字、二字、一字と字数の多いものから分類されている。禅語の下に注釈が付されている。巻末に次の書写識語がある。

寛文一三年癸丑仲夏上旬以薩之山川大圓主盟
留岳首座以秘書而龍吟禪庵南牕下寫焉

〔刊本〕

（ニ）『宗門方語』

元禄頃刊、中本、一冊、石井氏積翠軒文庫旧蔵。「京二條通玉屋町村平樂寺棚小兵衛開板」の刊記あるが、刊記の部分は後から補刻追記したものとされる。巻首尾に「宗門方語」とあり六十七丁、禅語の下に注釈が刻してある。分類は一字より十字（四より六のみ言を使う）。

（ホ）『宗門方語』

元禄頃刊、中本、一冊、石井氏積翠軒文庫旧蔵。無刊記本、（ニ）の刊記を後にまた削去して刷った後印本。巻首尾に「宗門方語」とあり六十七丁、禅語の下に注釈が刻してある。分類は一字より十字

（四字は四言、五字は五言、六字は六言と表記）。

なお川瀬は（ニ）（ホ）『宗門方語』は、田中忠三郎氏蔵（イ）『禪林之方語』の系統本を本拠としたものと考えるが、転写の際の誤写かあるいは上梓の折の誤刻として「沒巴鼻」の例を挙げている。

『宗門方語』の「一字」の「咄」の付注に「沒巴鼻與點義同」とあるのは田中氏本（増入部）にある「沒也鼻義也點同義也」に照らし明らかに「巴」は「也」字の誤りであると川瀬はする。[3] しかしながら「沒巴鼻（もつはび）」の語は禅の語録などではしばしば用いられる俗語であり、たとえば『大慧書』下、十一「覺得昏怛沒巴鼻可把捉時、便是好消息也」（昏怛にして巴鼻の把持す可き沒きことを覺得する時、便ち是れ好消息なり）、あるいは『五家正宗賛』巻第一、睦州陳尊宿の項目に「沒巴鼻抛出秦時轆轤鑽」（沒巴鼻、秦時の轆轤鑽（たくらくさん）を抛出す）とある。桂州道倫・湛堂令・大藏院主撰『諸録俗語解』には「把鼻」は「とらまえどころ」とされ、「巴」は「器物のもつところ、把と同じ柄なり」と説明されている。「手がかりなし、取りつくしまなし」の意味になる。[4]

つまり『宗門方語』の記述に訂正の跡を見るべきであろう。

（ヘ）『句雙葛藤集』

判紙本、四冊、石井氏積翠軒文庫旧蔵。巻末に「元祿五年壬申正月原刻」「文政十三年庚寅正月補刻」「書林京都御幸町御池下ル菱屋孫兵衛大坂心齋橋通安土町加賀屋善藏」の刊記ある。七巻四冊、第一冊首には「宗門葛藤集」という内題があり、各冊に「句雙葛藤鈔」の外題がある。「一字葛藤」から「二十字葛藤」まで三二二四句を収録。禅語には訓点が施され、語の下には片仮名混じりの注釈（ナリ式）が施されている。

以上が川瀬一馬博士の「第一類」に区分される諸本であるが、その分類理由はつぎのように語られている。

この類の特色は、一字の部より十字の部に至り、各句に其の意釋を漢文で注記してある點である。第二・第三類等に比して所集句數が少ない所から見ても、又、其の意釋が附記せられてゐるのも、本書編述の主旨に適ふものと思はれるから、恐らく原型にちかいものであらうと考へる。[5]

この区分条件に照らすと（ヘ）は、二十字葛藤まであり句数も多く、かつ漢文ではなく片仮名混じりの注釈（ナリ式）が施されていて明らかに条件に合致しない。これについては、『句雙葛藤集』の注釈中に「方語ニ曰ク」の表記があることによって、これが第一類の系統本をもとにして改変されかつ増補されたことは明らかであるとする。しかし前記の（イ）（ロ）（ハ）（ニ）（ホ）四本のいずれにも見えない句を含んでいることから、前記四本とは異なる同系統の異本を基にしていると類推している。[6] 川瀬説をまとめるならば、「第一類」は「方語」およびその類書となる。

ここで注意を要することは、この刊本は通常、外題の「句雙葛藤

理解にかかわる事柄であり、もう一つは『句雙紙』の依拠となった先行の類書特定の問題である。まず「方語」という語の理解については、次のように語られている。

書名も各々異ってはゐるが、禪林之方語といひ、禪林方語・宗門方語と稱するも略同稱といふべく、隨方鄉談も亦同色の命名と言ってよい。「方語」とは落節といふに同じく、便宜の意であるから、禪門（禪林）入門の手引きといふことで、本書の書名として相應しいものである。即ち、「禪林之方語」といふのが、原書名であらうと思はれる。[7]

すなわち「方語」は便宜の意であり、禪門（禪林）初学者の手引きの意味を表わすので、『句雙紙』の初期形態である「第一類」とするのがふさわしいとされる。

「方語」とはしかしながら「隨方鄉談」と同じく鄉談俚語、すなわち方言、俗語を意味する語である。[8]「方語」の名を持つこの種の書物は中世禪林で祖録を読むための辞書としての機能を果たしていたのである。

中世日本の禪林では禪僧の祖録の注釈書、いわゆる抄物に方語が盛んに用いられていたが、早苗憲生氏によれば、たとえば伝大灯国師筆『大川語録抜萃』に「担板　方語曰只見一辺」など四語が、『臥雲日件録』に「牡丹花下睡猫児　方語意不在花」、『五燈抜萃』（室町末期写本）に「驢事　方語一心無二用」などの例があるとされる。[9]

鈔」の名で呼ばれているが（「句雙葛藤集」の名はほかでは見かけない）、内題の「宗門葛藤集」が全く別系統本の名と同一なことである。『駒沢大学図書館編　新纂禪籍目録』（日本仏書刊行会、一九六二年）の《句雙紙》の項目では、「川瀬分類」の「第一類」として、「第一類宗門葛藤集　内題葛藤集　表題宗門葛藤集　内容公案集」と記載されている。ここで挙げられている公案集としての『宗門葛藤集』は川瀬分類「第一類」の『宗門葛藤集』とは全く別系統の書物である。手元にある一本を挙げれば、

外題・内題「明治新刻　宗門葛藤集出所附全」上下二巻一冊。刊記　明治二三年十一月十日刻成・出版、発行兼印刷者　京都市三條通高倉東入枡屋町四番戸　出雲寺文次郎
著者　京都市上京區元三十四組浄土寺町七十八番地　大興寺住職　雲蕃智道

内容は古則公案が二七二則収録され、出典が首書されている公案集である。こうした錯誤を防ぐためにも（へ）『句雙葛藤鈔』は以後本論文では、内題「宗門葛藤集」を用いず「句雙葛藤鈔」の名で統一することにしたい。

三

さて「方語」系統書を「第一類」とした川瀬説の分類の根拠であるが、およそ二つの理由が想定される。一つは「方語」という語の

「牡丹花下睡猫児」に対する『方語』（東福寺霊雲院蔵）の注解を見ると「意在舞蝶　又因時直示也」とある。また『五燈會元笑山抄』『五燈會元一山抄』『五燈會元蒙山抄』『碧巌録不二鈔』『碧巌集萬案鈔』など中世禅林の抄物でも多数の方語が用いられている。『碧巌録不二鈔』では「箭過新羅　方語不知落處」とあるが、さらに江戸中期の『碧巌録種電鈔』でも「箭過新羅　方語不知落處」と方語の注釈がそのまま踏襲されている。

上記の抄物は日本僧の編纂であるが、宋の晦堂智昭編『人天眼目』巻六末尾に「禪林方語　新増」が付刻されている。「蠟人向火」より始まり、「俗人沽酒三升」まで、「三字」（一）、「四字」（七八）、「五字」（六八）、「六字」（八）、「七字」（九）、総数一六四句を収める。川僧慧済の『人天眼目抄』にはこの新増部分は無いが、宋代末期の禅文献で確認ができるとされる。[10] 日本編纂以外にさらには黄檗僧の来朝により将来された明・清時代の『方語』系等本が存在する。

日本で編纂された『方語』系等本は、虎関師錬が、禅学はもとより儒教百家、稗官小説、さらに郷談俚語にまで精通していたとその博学を称える一山一寧をはじめとした大休正念、竺仙梵僊等来朝帰化僧の口伝によるものが集められたものであろう。また入宋元僧により編纂されたものもあると考えられる。[11]

『方語』系等本に祖録の注釈のための辞書としての用途のあったことは以上見てきたとおり明らかである（ただし辞書といっても手控え程度の簡単な内容でしかない）。中世日本の禅林では古則公案を看、さらにその見処に下語（著語）するという修行形態が定着していたが、『方語』（東福寺霊雲院蔵）中に「黒漫漫」「仁義道中」「鉄蛇横古路（鉄蛇古路に横たわる）」「明修桟道暗度陳倉（明に桟道を修し、暗に陳倉を度る）」等、隠山下の下語の句が採られているところを見ると、入室参禅の際の著語手引書として用いられた可能性も否定できないであろう。

以上のような観点からすると、『方語』系等本は「内容」に関する限り、禅語のうち理解の難しい方言、俗語を集め、これに簡単な注釈を付けたものであり、所謂抄物としての「句雙紙抄」と共通するものがある。また「形式」についても、句の字数排列という形態がこの種の「句雙紙」と共通する。「用途」という観点からは、祖録の注釈のための手控えとしての辞書機能のほか、先に見たように入室参禅の際の著語手引書として用いられた可能性も排除できないであろう。

川瀬が理解したように禅門初学者のためにだけ編まれたものであるとは言いがたいが、以上のような共通点からすると、『句雙紙抄』の少なくとも類書であることは間違いないであろう。ただしすでにふれたように宋代編纂の『人天眼目』巻六末尾に「禪林方語　新増」として「方語」が付刻されていることからするならば、『句雙紙』の内に入れ「第一類」とするのではなく、先行類書として位置づけるのが適当であろう。

さて『方語』系統書を「第一類」とした川瀬説の分類の根拠の二

つ目であるが、これは『句雙紙』の依拠となった先行の類書特定の問題にかかわる。川瀬は室町末期の禅僧が呉越春秋・容齋三筆・唐人絶句集・世説新話・新序・竹圃散人夢話・康瓠集等を抜抄集記した写本の最後に「群書鈎玄」という書の書写があることに触れ、次のように語る。

其の依據となつた先行の類書があるか否かに就いては、在來少しも考へられてゐないが、石井氏積翠軒文庫藏の「群書鈎玄」と題する一書に據つて見れば、句雙紙の編纂は群書鈎玄に倣つたものである事が明らかであると思ふ。[12]

川瀬の報告によれば、『群書鈎玄』の書写は本文十三丁、巻頭に「群書鈎玄　至正七年孟秋望　臨卭後學高恥傳輯」とあり、「一字」、「二字」、「三字二句」、「三字」、「四字二句」、「四字」、「五字二句」、「六字二句」、「七字二句」、「八字二句」、「三字四句」、「四字四句」、「五字」、「六字」、「七字」、「膾炙句」の順に語が収録され、全句すべて下方に小字で出典が注記され、巻末に「群書鈎玄第十二終」とあり、六七〇余句を収めているとされる。[13]

『群書鈎玄』は現在『四庫全書存目叢書　子部　第一七二册』の内に収録されている。北京大学図書館蔵元至正七年刻明修補本の影印版で、版木の損傷が激しく判読不可能な箇所がきわめて多いが、この北京大学図書館蔵本を見れば、積翠軒文庫旧蔵の写本は抜抄である事がわかる。

元の至正七年（一三四七年）に高恥傳により編まれたこの書は、

あらゆる方面の典籍から語句が集録され、「一字の部が古文を列記してあるのと、二字の部が名詞の異稱を多く集めてあるのとを除けば、他は殆ど金言集の如き内容を具へてをり、初學の教化に資する爲に編纂せられたものである事が判る」[14]と川瀬が記す通りである。

影印版によれば全十二巻、「序」を含め一六四丁を数え収録語句数は五〇〇〇をはるかに超え一〇〇〇〇に迫るものと思われる。ただ上記の川瀬報告にあるように字数による排列形式を採るが、「七字」という小見出し表記のみが欠落している。なお巻末に以下の説明文が補刻されている。

羣書鈎元十二卷　浙江巡撫採進本

元高恥傳撰恥傳臨卭人是書雜採古事古語以字數爲標目次第自一字起至七字止其不能限以數者別爲膾炙句二卷其一字類不能成句則以古文竒字當之龐雜殊甚後附刪節通鑑一卷題曰建置沿革又附陳騤文則一卷更無倫理前有至正七年恥傳自序乃盛自夸飾過矣[15]

ただし、北京大学図書館蔵本では、「建置沿革」は上下に分けられ巻第十、巻第十一とされ、文則は巻第十二に収められている。

問題は句双紙の編纂は『群書鈎玄』に倣ったものであるかどうかである。「室町末期の禅僧の筆」によるに相違ないと川瀬が判断した写本のなかに『群書鈎玄』の抜抄があったということ、さらに『群書鈎玄』がきわめて簡単ではあるが出典を注記していること、多少変則的ではあるが字数排列構成になっていることなどが判断材

料になっていると思われる。膨大な収句のなかには禅籍からの語句も散見する。

一、二挙げればたとえば「四字二句」の部で「心不負人面無慙色 傳燈録」（心人に負かざれば面慙る色無し）とあり、『景徳傳燈録』「巻第十二　睦州龍興寺陳尊宿」の項からこの語句は採られていることが確認できる。あるいは「大象不游於兎徑 傳燈録」とあり、これも『景徳傳燈録』「巻第三十　永嘉眞覺大師證道歌」の項に「大象不游於兎徑　大悟不拘於小節」（大象兎徑に游ばず　大悟小節に拘らず）とある、その七言上句を採っている。

ただし禅語は概観しただけでも極めて少なく、内容上は「句雙紙」の編纂が『群書鈎玄』に倣ったものであるとは断定しがたい。用途においても「下語」のために用いられたとは到底考えられない。ただ字数排列による「金言集」「金句集」という体裁において、あるいはそうした発想において先行類書と言えないでもないであろう。

また早苗憲生氏は、禅林の句を収録した『叢林獅子吼集』『寸金宝鑰』『頌句韻箋』等の宋版が来朝僧によって将来された（「禅林句集提唱」第一回『禅宗』三六〇）といわれるように『群書鈎玄』と類似した体裁の句集が宋代に出版されて本朝に将来されたかもしれないとする。[16]

『群書鈎玄』は日本の五山僧の間にもたらされ、瑞渓周鳳の『刻楮集』二十三、『活套集』（大谷大学蔵）壬（第九冊）、『臥雲日件録』第五十七冊表紙にその書き抜きが載っている。

四

次に川瀬一馬博士による区分の「第二類」を見てみよう。

第二類

〔写本〕

（イ）『（句雙紙）』

蓬左文庫蔵本、大本、一冊、四九丁、内容は「句雙紙」室町末期写。「御本」の印記があり、徳川家康から尾張藩主徳川義忠に譲渡されたいわゆる駿河御譲本の中の一書。

「一字」は「収」から始まり計二一語、以下「二字」四三句、「三字」五二句、「四言」三一五句、「五言」一一二句、「六言」九九句、「七言」一七三句、「八言」一一六句、と単句を収録し、その後で「五言対」一四七句、「六言対」四九句、「七言長句」八一句を収め、合計一二〇八句[17]を収集、ただしこのうち十一句は語句中の一字ないし二字のみ異なる句である。

句には返り点、送り仮名が施され、漢字にまま振り仮名を付し、句頭には内容分類を示す略記[18]が冠せられているとされる。出典注記はない。

（ロ）『（句雙紙）』

川瀬一馬博士旧蔵本、一冊、室町末期写、本文墨附、五五丁、巻末丁を欠く。「一字」は「収」から始まり「二字」、「三字」、「四言」、

「五言単句」、「五言対句」、「六言単句」、「六言対句」、「七言単句」、「七言対句」、「八言単句」にいたる。八言は単句までで以下を欠くとされる。

（八）『（句雙紙）』

川瀬一馬博士旧蔵本　慶長一七年写、一冊、内題は「前箭」、本文墨附、一一四丁、他に巻首に五丁、巻末に十一丁（内一丁白紙）佳句抄出の加筆があり、本文の著者が後に書き加えたものとされる。さらに本文中句意および出典等の加筆が見受けられるがいずれも本文より後同筆者が書き加えたものとされ、巻末に次のような書写識語があることが報告されている。

右以上墨附紙數百十八丁有之

皆慶長十七年壬子林鐘佳日　不孤齋染悪筆畢

「一字」より「二字」、「三字」、「四言」、「五言（単句）」、「六言（単句）」、「七言（単句）」、「八言（単句）」、「五言（対句）」、「六言（対句）」、「七言（対句）」の順で句が掲げられているとされる。字数排列体『句雙紙』。

（ニ）『（句雙紙）』

龍門文庫蔵本、一冊、室町末期写、内容は「句雙紙」。「一字」「嗟」より「八言」まで単句を収録し、後に「五言対句」、「六言対句」、「七言対句」で分類してあり、総数二〇三一句。さらにこれ以外に後の補筆による増補がある。朱筆の庵点及び句の出典を後から頭注書き入れした部分があるとされる。字数排列形式による『句双紙』。

〔刊本〕

（ホ）『句雙紙片カナ附』

元禄六年刊二巻本、横本、上下合一冊、旧帝国図書館蔵、『句雙紙片カナ附』の原題簽があり、句には返り点、送り仮名が施され、漢字にはまま振り仮名が付されている附訓刻本。上巻七七丁、下巻（七言以下）七九丁。「収」より「一字」は始まり、八〇語、以下「二字」一〇二句、「三字」一三一句、「四言」一〇二三句、「五言」四二六句、「五言對」五一三句、「六言」二七〇句、「六言對」一四三句、「七言」五四六句、「七言對」四二四句、「八言」四〇〇句、「八言對」二七句収録され、合計四〇八五句が収められている。（ただし一句中の一字ないし複数字の異なるものは併記され一句分として扱われている。）出典注記はない。字数排列形式による『句雙紙』。この刊本は広く世間に流布していたと思われ、現存するものも多い。

（ヘ）『句雙紙片カナ附』

元禄頃刊二巻本、横本、上下合一冊、本書は（ホ）元禄六年刊二巻本とは別版であるが、版式から見てほぼ同じ頃の刊行であろうと川瀬は推測し、初刻以来たびたび刊記のみを改刻して刷られ世にもっとも流布した刊本としている。静嘉堂（松井博士旧蔵）の一本は巻末に「書林長村半兵衛」の刊記があり、刊記を追刻した後印本とされる。川瀬博士旧蔵の一本は巻末の刊記のみ「京都書林寺町三條下ル著屋宗八」と改められているが、他は（ホ）元禄六年刊二巻本とすべ

て同じであると報告されている。字数排列体『句雙紙』。

（ト）『禪林集句』（『増補首書禪林句集出所付』）

四巻、判紙本、合一冊、石井氏積翠軒文庫旧蔵。巻末に貞享五年の跋文があり、跋文末に以下のような識語がある。

貞享戊辰正月齋日　洛橋巽隅山阜己十子謹識

さらに以下のような刊記がある。

洛下堀川通本國寺前　小佐治半右衛門

大坂心齋橋筋　古本屋清左衛門

本文総紙数一八五丁、他に跋文一丁、本文は五七丁（五言対句）以下を第二巻、九六丁（六言）以下を第三巻、一三九丁（七言対句）以下を第四巻とする。なおまた巻首に「集中訓解書」と題して、本文各句の下にその出典を注解した参考書名を列刻した一丁を添えてある。巻首に「句双紙尋覓」と題し、版心に「禪林集句」、巻末跋文のみ「禪林襍句」とある。「一字關」、「二字關」、「三字關」、「四言」、「五言」、「五言對句」、「六言」、「六言對句」、「七言」、「七言對句」、「八言」、「八言對句」の表題のもとに編集されている。また四言以下各字類の末に「外句增續」の部分が加えられている。「一字關」は「收」より始まる。全巻各句の下には出典が注記されている。字数排列体。

以上が川瀬一馬博士の前掲論文中の貞享五年版『禪林集句』に関する記述内容であるが以下気が付いた点を二、三挙げておく。

この書は現在、影印本の体裁で二種類の印刷本が刊行されている。[19]

その内、一書は禅文化研究所発行のものであるが「積翠軒文庫」という蔵書印が影印されている。新たな蔵書印から現在は所有が禅文化研究所に移っていることが分かる。ただし本書は「乾坤」二巻本であり（合一冊であるかは不明）、石井氏積翠軒文庫蔵とする川瀬記述の四巻本とはこの点で食い違う。さらに禅文化研究所発行のものは巻首に「禪林集句乾」と記されていて、「句双紙尋覓」という題簽は見当たらない。

おそらく石井氏積翠軒文庫旧蔵の貞享五年版『禪林集句』は別版を含め複数あったものと推測される。なお跋文末の識語中に「己十子」とあるのは最後に触れるが、「已十子」の誤刻である。

貞享五年版『増補首書禪林句集出所付』は「一字關」八一語、「二字關」一〇六句、「三字關」一三三句、「四言」一〇一五句（うち外句增續四〇句）、「五言」四七〇句（うち外句增續四四句）、「五言對句」五七八句（うち外句增續六八句）、「六言」二九六句（うち外句增續二六句）、「六言對句」一五八句（うち外句增續一五句）、「七言」五九九句（うち外句增續三〇句）、「七言對」四七八句（うち外句增續五四句）、「八言」四二八句（うち外句增續三一句）、「八言對」三七句（うち外句增續一〇句）、総数四三七九句（うち外句增續三一八句）を収録する。字数排列形式で編纂されている。

（ホ）の元禄六年（一六九三年）刊本より五年ほど先に出たこの貞享五年（一六八八年）版『増補首書禪林句集出所付』はこの名の他に「句双紙尋覓」（内題）、「禪林雑句」（版心）、「禪林集句」（版心）の

名を持つが、収録語の多さから見てもまた出典注記や首書の内容の詳細さから見てもこれまで出た類書の集大成とみなされるものである。以後『増補首書禪林句集出所付』として永く禅林句集の定本となり、現在でも貝葉書院から『増補首書禪林句集出所付』乾坤二巻の和綴本として、入室参禅の際の語調べ（著語）の用に供されている。

以上、川瀬一馬博士が「第二類」に分類した諸本であるが、これらは第一類の系統本『方語』を参考にして句数を増加し改編したものとされている。[20] しかしながらすでに見たように、『方語』系統本は広い意味で『句雙紙』の先行類書とするべきで、禅門の方言、俗語を集めた『方語』から句数を増加し改編し、直接『句雙紙』が成立したと想定するのは無理であろう。

五

川瀬区分の「第三類」の写本、および刊本の諸本を見てみよう。

第三類

〔写本〕

（イ）『（句雙紙）』

伝大徳寺玉室宗珀筆、慶長・元和頃の書写。正隠宗知手沢本。本文墨附三九丁。川瀬一馬博士旧蔵。巻末から三葉目裏に「正隠」の鼎形朱印があり、正隠は大徳寺玉室宗珀の法嗣であることから、本書が玉室宗珀の筆になるものではないかという説（添状あり）があるという。この添状については不明。巻首の写真が川瀬論文中に掲載されているが[21]以下のような分類を採っていることが分かる。

普　咦（イヽ）　的　無　失（シツ）

鉄壁　鉄漢　逢着

黑漫漫、　露堂堂、　明（ナル）如レ日ノ　鉄團（ダン）圞（ラン）

（中略）

只這是（タヽコレコレ）　非二言説一ニ　無レ処ノ尋ルニ　没蹤跡

頭上漫漫、　脚下漫漫、　顕顕、露露、

（後略）

すなわち「一字」等の字数分類標識はないが、字数が変わる毎に改行し十字の部にまで至っているとされる。川瀬によればさらに第十一丁表に至ると「ロ」という標識があり、再び「錯」「苦」「死」等の一字より始まっているとされ、第十五丁裏よりは「爲　見ル一麽（ヤ）　會（ス）一麽　恰（アタカ）一是（ゼ）」などとあり、全巻ある種の内容に分類され、その各部がさらに字数によって細分化され、第三十七丁裏よりは各句に注解が加えられ重複の句も見られるとされる。全巻、本文に附訓を加えているが、附注はない。内容分類形式による『句雙紙』。分量は「第二類」系統本とほぼ同量であるとされる。

（ロ）『句双紙（抄）』

東京大学国語研究室蔵。江戸時代初期の書写。首二丁分程欠、袋綴。表紙に「句双紙」と墨書。墨附五九丁。柱の部分には一から六十までの丁数が墨書されているが、その二四が欠落、本文は欠けて

いないので数字の書き誤りとされる。

柳田征司氏によれば、本書は従来尾欠と見られてきたが最後の二句のうち前の一句は、二三丁に説明だけを挙げて禅句を脱落させたために追補されたものと見られ、後の一句も何らかの事情で付け加えられたと見ると、尾欠本とは見られないとされる。[22] 内容分類形式による『句雙紙抄』。

（八）『句双紙抄全』

明暦二年刊本。石井氏積翠軒文庫旧蔵、横本、一冊、八〇丁。「句双紙抄全」の題簽がある。一字・二字・三字の部は細分なく、四字以下は、本分・現成・色相・截断・直（指）・為人・機関・両意・関賊・抑揚・大人・大悟・収などの内容別に細分化され、さらにそれぞれを四言から七言に亘って対句・絶句の順に排列している。まれに八言や九字（大人の部に一句のみ）を加えている。内容分類形式による『句雙紙抄』。巻末に以下の刊記がある。

明暦貳丙申初夏吉辰
二條鶴屋町田原仁左衛門新刊

（ニ）『句双紙抄』

明暦二年刊本。国会図書館蔵本、横本、一冊、八〇丁。新装表紙に「句双紙抄」という題簽がある。「一字」は「普」から始まる。石井氏積翠軒文庫旧蔵本と同様、一字（二〇字）・二字（二四字）・三字（三五字）の部は細分なく、四字以下は、本（分）（六一句）・現（成）（五六句）・色（相）（四一句）・截（断）（二三句）・直（指）（五句）・為（人）（二〇句）・機（関）（六六句）・関（賊）（三二句）・両（意）（一四句）・抑（七〇句）・揚（一五句）・抑揚（一一句）・大人（二六句）・大悟（三句）・収（六七句）と内容別に細分化され、その後再び、本（分）（六句）・現成（五句）・色相（八句）・截断（二句）・為人（二句）・機（関）（一〇句）・関賊（七句）・抑（五句）・大人（二句）、の区分が繰り返され句が増補されている。それぞれ内容毎に四言から七言に亘って対句・絶句の順に排列している。まれに八言や九字（大人の部に一句のみ）を加えていること、および巻末刊記も積翠軒文庫旧蔵本と同様。内容分類体『句双紙抄』、総数六三六句を収録。

（ホ）『注入句雙紙全』

駒沢大学図書館蔵本。明暦二年刊本である国会図書館蔵本と同版の句双紙抄。「注入句雙紙全」と外題が墨書されている。五六丁が切り取られていて欠損している。それゆえ「揚」一五句のうち七句が欠損、総数六二九句となっている（本来は六三六句）。

六

以上が川瀬分類による「第三類」諸本である。川瀬によると、「第二類」系統本をさらに内容によって分類し、細分を加えたものが「第三類」系統本であり、この類は大別すると（イ）伝大徳寺玉室宗珀筆のように、ある種の内容によって分類され、さらに各部が

字数によって排列されている『句雙紙』と、「第三類」系統本の『句雙紙』を同様の編集の仕方で抄出して、片仮名交じりの注解を施した、（ロ）東大本や（ハ）、（ニ）、（ホ）の明暦二年刊本のような『句雙紙抄』の二種類があるされる。川瀬の分類は見てきたように、一種発展史的な観点からなされていて、その始まりを「禅林入門手引き」を意味するとする『方語』系等本に置いている。そして本文中に「方語ニ……」という注解が多くあることから元禄五年原刻の『句雙葛藤鈔』を『方語』系等本をもとにして改変増補されたものとして「第一類」に入れている。[23] すでに詳しく見たように「方語」は「方言、俗語」の意味であって「禅林入門手引き」ではないこと、「方語」が「禅の俗語」であれば『句雙葛藤鈔』で引用されていても不思議はなく、そのことを以って『句雙葛藤鈔』を『方語』系等本すなわち「第一類」系等本に入れる理由にはならない。たとえば「第二類」系等本とされる已十子編纂の貞享五年刊本『増補首書禪林句集出所付』の「一字關」「囚」の首書の注解にも「方語ニ云牽レ船聲也又出ス力ヲ也」とある。「第二類」から「第三類」へは川瀬説に依れば『句雙紙』から『句雙紙抄』への発展過程であるが、柳田征司氏は原典『句雙紙』について次のように語っている。

「句双紙抄」が原典「句双紙」を注釈したものであるとするならば、その原典「句双紙」の構成が問題となる。しかし、今問題にしている「句双紙抄」の原典は、今のところその存在が知られていない。（中略）そのような原典「句双紙」を、少なくとも直接的には用いないで、抄と同事に原典の部分も成立した、という可能性も考えられるからである。[24]

原典『句雙紙』、原典『句雙紙抄』が特定できない限り、「句雙紙」の成立史的分類は無理であり、当面は「内容」「形式」「用途」から分類をする以外ないであろう。柳田征司氏、早苗憲生氏の分類法を参照すると、上記諸本は以下のようにまとめることができる（ただし川瀬一馬博士が扱わなかった『句層私抄』も形式参考のために挙げる）。

句の字数により分類排列する編集形式を、字数排列形式と呼び、句の内容によって分類配列する編集形式を、内容分類形式と呼ぶことにする。（なお川瀬博士分類「第一類」の『方語』系統書はその「用途」等から検討したように「句双紙抄」の内に入れず、先行類書とする）。

（一）字数排列形式「句雙紙」（字数により分類排列する句雙紙）

①第二類（イ）『（句雙紙）』、蓬左文庫蔵本、室町末期書写。

②第二類（ロ）『（句雙紙）』、川瀬一馬博士旧蔵本、室町末期書写。

③第二類（ハ）『（句雙紙）』、川瀬一馬博士旧蔵本、慶長一七年書写、内題「前箭」。

④第二類（ニ）「（句雙紙）」、龍門文庫蔵本、室町末期書写。

⑤第二類（ホ）『句雙紙片カナ附』、旧帝国図書館蔵本、元禄六年刊本。

⑥第二類（ヘ）『句雙紙片カナ附』、静嘉堂蔵本、元禄頃の刊本。
⑦第二類（ト）『禪林集句』、石井氏積翠軒文庫旧蔵本（複数か）、已十子編貞享五年刊本。

（二）内容分類・字数排列形式「句雙紙」（句の内容によって分類し、さらに各部を字数により分類排列する句雙紙）
①第三類（イ）『（句雙紙）』、川瀬一馬博士旧蔵本、伝大徳寺玉室宗珀筆、慶長・元和頃の書写、正隠宗知手沢本。

（三）字数排列形式「句雙紙抄」（字数により分類排列する句雙紙抄）
①第一類（ヘ）『句雙葛藤鈔』、石井氏積翠軒文庫旧蔵本、文政十三年補刻版本、内題「宗門葛藤集」。

（四）内容分類・字数排列形式「句雙紙抄」（句の内容によって分類し、さらに各部を字数により分類排列する句雙紙抄）
①第三類（ロ）『句雙紙（抄）』、東京大学国語研究室蔵本、江戸時代初期の書写。
②第三類（ハ）『句雙紙抄全』、石井氏積翠軒文庫旧蔵本、明暦二年刊本。
③第三類（ニ）『句雙紙抄』、国会図書館蔵本、明暦二年刊本。
④第三類（ホ）『注入句雙紙全』、駒沢大学図書館蔵本、③と同版の句雙紙抄。

（五）字数排列・内容分類形式「句雙紙抄」（句の字数により分類排列し、さらに各部を内容によって分類する句雙紙抄）
①『句層私抄』、一冊、六八丁、山鹿家蔵本、江戸初期書写、山鹿素行手沢本。一〇九五句を収録。

七

本論考の最後に、貞享五年刊本『増補首書禪林句集出所付』（内題「句双紙尋覓」、版心「禪林雑句」「禪林集句」）の跋文に触れておきたい。

「洛橋巽隅山阜已十子」による跋文は「自二從古一此集者花園開山関山國師七世孫東陽英朝禪師之所集也」（古より此の集は花園開山関山國師七世の孫東陽英朝禪師の集むる所也）の一文より始まる。東陽英朝については師蠻の『延寶傳燈録』（第二十八巻）や『本朝高僧傳』（第四十三巻）に事跡や著作が載るが、跋文にある、禪句を集め『禪林句集』を編んだことはどこにも記載がない。

ただ妙心寺の雪潭風砡編纂の『宗統八祖傳』には「別二撰一正燈録十四巻一ヲ校二定一ジ百丈清規江湖集等ノ書一ヲ又裒二ム前後箭一ヲ前箭世謂二之一ヲ句雙紙一ト盛二ニ行一ル當時一ニ」（別に正燈録十四巻を撰す。百丈清規江湖集等の書を校定し前後箭を裒（あつ）む。前箭世に之を句雙紙と謂い、盛んに當時に行わる）と記載されている。

先に挙げた、慶長一七年書写の川瀬一馬博士旧蔵本『（句雙紙）』は内題が「前箭」であった。また名古屋大学皇学館文庫蔵本に江戸初期書写の『前箭』という句双紙がある（一字より七言まで三三九

九句を収録)。

さてこの跋文末の「洛橋巽隅山阜」とは、京の三条大橋の巽(東南)にある山、僧喜撰の和歌に謂う都の巽「宇治山」となるので「黄檗山」であろう。跋文によると、「已十子」なる者は初め儒学を学び、中頃禅門に入るも願いかなわず儒門に復すが、諸禅徳の恩恵に報いるためにこの書を編んだとあるので、一時黄檗宗万福寺の僧であったかもしれない。「已十子」という名は宋の詩人戴益の七言絶句「探春」[25]から採ったものである。

探春　(春を探る)

終日尋春不見春　(終日春を尋ねて春を見ず)
杖藜踏破幾重雲　(藜を杖つき踏破す　幾重の雲)
歸來試把梅梢看　(帰り来りて試みに梅梢を把りて看れば)
春在枝頭已十分　(春は枝頭に在って　已に十分)

早苗憲生氏によれば、この跋文を認めた「已十子」は、延宝三年、元禄十二年刊『書籍目録』では虚白、元禄五年、同九年、宝永六年、正徳五年刊の『書籍目録』では祖実とする。虚白、祖実は毛利貞斎の字であり、名は瑚珣、通称は香之進、貞斎は号であるという。大坂の人で京都に住して儒学を講じたとされる[26]。

注

(1)『和訓略解禪林句集』では一字から三字の禅語は一字関、二字関、三字関と名づけられ、あとは四言(外句増続を含む)、五言(外句増続を含む)、五言対句(外句増続を含む)、六言(外句増続を含む)、六言対句、七言(外句増続を含む)、七言対句(外句増続を含む)、八言(外句増続を含む)、八言対句(外句増続を含む)に分類されている。各字数では五十音順の排列にはなっていない。

『塗毒鼓　続編　全』では、一字、二字、三字〜二十字、二十字以上、に分類され各字数では五十音順の排列にはなっていない。禅語は訓点のない白文、出典表記なし。『禅語字彙』は、一字関、二字辨〜二十字辨、その句の読み出し音により五十音順。『註訓禪林句集(改訂版)』は、一字〜八字、十字(五言対)、十二字(六言対)、十四字(七言対)十六字(八言対)、十八字以上、その句の頭字の音により五十音順。『新纂禪語集』は一字〜二十字、二十字以上、その句の読み出し音により五十音順。『禪林語句鈔』は一字〜十字(十一字を二句含む)、十二字、十四字(十五字十三句含む)、十六字(十七字二句、十八字七句、十九字二句含む)、二十字以上、その句の頭字の音により五十音順。

(2)川瀬一馬「句雙紙考」(『積翠先生華甲寿記念論叢』一九四二年八月、のち補訂して『日本書誌學之研究』大日本雄辯會講談社一九四三年六月に所収)。

(3)川瀬前掲書一三八四頁

(4)入矢義高、古賀英彦『禅語辞典』思文閣出版　一九九一年　四五一頁

(5)川瀬前掲書一三七七〜一三七八頁

(6)川瀬前掲書一三八四〜一三八五頁

(7)川瀬前掲書一三七八頁

(8)早苗憲生「『句双紙』の諸本と成立」五八四頁　新日本古典文学大系52『庭訓往来　句双紙』(岩波書店　一九九六年五月)所収

(9)早苗前掲書五八四頁

(10)柳田聖山・椎名宏雄共編『禅学典籍叢刊』第十巻下　解題　七〇〇頁(臨川書店　二〇〇〇年八月)

(11)早苗前掲書五八四頁

(12) 川瀬前掲書一三七二頁。書名『群書鈎玄』は韓愈の『進學解』の「言を纂むる者は必ずその玄を鈎す」に拠る。「鈎」は「鉤」の異体字。

(13) 川瀬前掲書一三七三～一三七五頁

(14) 川瀬前掲書一三七五頁

(15) 四庫全書存目叢書編纂委員会編『四庫全書存目叢書　子部第一七二冊』、一九九五年九月、五〇四頁

(16) 早苗前掲書六〇二頁

(17) 蓬左文庫蔵室町末期写本は現在二種類の刊行がある。①木村晟　片山晴賢編輯　近思文庫企画『梅田信隆猊下喜寿記念出版　禅林句雙紙集』(非売品)　小林印刷株式会社出版部　一九八四年九月　一六一～二二三頁　②山田俊夫　入矢義高　早苗憲生校注　新日本古典文学大系52『庭訓往来　句双紙』岩波書店　一九九六年五月　一一三～三〇二頁　①②とも収録語句は同じであるが、「禍及私門」「禍出私門」のように一字異なる句ないし「逼塞太虚」「逼塞乾坤」のように複数字異なる句を別句として数えるか、同一句中に併記して一句と数えるかで両書は収録総数を異にしている。①は後者②は前者の数え方を採る。①によると合計一二〇八句、②によると一二一九句となる。川瀬の報告によると「二字」(三五)、と「七字長句」(六三)のみ数が異なるが(①②ともに四三、八一)理由は不明。

(18) 川瀬は「出典の略書名」としているが、「本」は「本分」「見」は「現成」の略記号であり、内容分類を表す。

(19) ①『定本禪林句集索引』財団法人禅文化研究所編集発行　一九九〇年一一月。首書(影印)の欄外に字句の異同等が注記印刷されている。「積翠軒文庫」という印記の影印がある。二頁から四頁に亘り「禪林集句集中訓解書」があり、本文は「禪林集句乾」(「一字關」から「五言對句」の「外句增續」まで)と「禪林集句坤」(「六言」から「八言對句」の「外句增續」まで)分けられている。「一字關」、「二字關」、「三字關」、「四言」、「五言」、「五言對句」、「六言」、「六言對句」、「七言」、「七言對」、「八言」、「八言對」の表題のもとに編集されている。版心の影印はカットされていて、そこに刻された題簽がどのようなものかは不明。跋文と識語は川瀬の記述内容と変わらないが「己十子」が「已十子」と訂正されている。刊記の影印はない。

②柳田聖山・椎名宏雄共編『禅学典籍叢刊』第十巻下　臨川書店　二〇〇〇年八月。表紙も含めて完全な影印本体裁で刊行されている。外題は「首書増補句双紙出所付」、内題は「句双紙尋覓」、版心に「禪林集句、禪林雑句」とある。跋文、識語、刊記共に川瀬の記述内容と同じであるが、「已十子」が「己十子」と誤刻されている。字数による分類は「一字関」、「二字関」、「三字関」、「四言」、「五言」、「五言對句」、「六言」、「六言對句」、「七言」、「七言對」、「八言」、「八言對」と、「関」字の違いを除いては①と同じ。四言以下すべて脚韻で排列してあることも共通。

(20) 川瀬前掲書一三八六頁

(21) 川瀬前掲書一三九五頁

(22) 柳田征司「句双紙抄の諸本とその言語」『國語國文』第四四巻第一〇号　一九七五年十月　二〇頁。東大本は、吉田澄夫『天草版金句集の研究』(東洋文庫　一九三八年十月)中に一丁分が写真版で載っている。なお一頁下段文「3明暦三年板本一冊(国会図書館・駒沢大学図書館蔵)(以下明暦版本と呼ぶ)」の「明暦三年」は「明暦二年」の誤植。「句雙紙抄」の二系統分類概念「字数分類体系統本」と「内容分類体系統本」が提唱されている重要論文であるため、この箇所を引用したと思われる来田隆編『句双紙抄総索引』(清文堂　一九九一年十月)　解説三八一頁、さらにこの来田論文を引用した柳田聖山・椎名宏雄共編前掲書　解題六九四頁ともに誤植のままである。

(23) 川瀬前掲書一三八四頁

(24) 柳田征司前掲書三頁

(25) 『聯珠詩格』に載る。元の于濟・蔡正孫の編による二十巻の書。唐宋の七言絶句を三百二十余格に分類して収録する。中国では亡失したが、

わが国に残り、室町以降広く読まれた。この詩は

盡日尋春不見春（尽日春を尋ねて春を見ず）

芒蹊踏遍隴頭雲（芒蹊踏遍す隴頭の雲）

歸來適過梅花下（帰来適さ梅花の下を過ぐれば）

春在枝頭已十分（春は枝頭に在って已に十分）

とも伝わる。

(26) 早苗前掲書五九一～五九二頁